

研究ノート

ラジオ番組制作は、キャリア教育に活用できるのか (2)

坂田 謙司ⁱ, 都築 美代子 (石倉 美佳)ⁱⁱ

キーワード: ラジオ, 番組制作, キャリア教育, アクティブラーニング, 大学生

第6章 ラジオ番組制作を、どのように
キャリア教育に結び付けるのか

前章までは、坂田教授のゼミでの活動を通じての検証だったが、この章では筆者の経験を踏まえて、ラジオ番組制作をどのようにキャリア教育に結び付けていくのかを述べたい。今後の研究の方向性や方法についての考えを述べるものであるため、結果については未知数であるが、自身の考えを言語化してまとめておく。

6-1 ラジオ番組制作を使ったキャリア教育の
プログラム化

一口にラジオ番組といっても、それが報道系なのか、情報バラエティなのか、音楽番組なのかなど、ジャンルも様々である。またどこまでの工程を自分たちで担当するのかという範囲も様々である。そこで、誰でも取り組みやすいものにするため、筆者が番組で行っていた「ラジオレポート制作」をプログラム化してみたいと考えている。レポートの手順は、①元となる取材ネタを提案することに始まり、②取材交渉、③取材 (インタビューの録音なども含む)、④構成を組み立て、⑤録音素材の編集 ⑥原稿を書く、⑦レポートする、までの一連の作業を1人ないしグ

ループで進めるといふ、シンプルなものである。1本のレポートは約6分前後、文字数にすると2000字前後で、これを複数制作し、キャスター役が聞き手となって進行していくと30分から1時間の番組ができあがる。あらかじめ番組のテーマを決めておくと、レポートの内容が定まり、まとまりがあるラジオ番組を制作することができる。プログラムは、以上の工程を作業ごとに分類し、手順などを分かりやすくまとめたものにする予定だが、それは今後の課題としたい。

こうした一連の作業を、先に紹介した「人生100年時代の社会人基礎力」(第2章, 2-3, 図1)で示された12の能力要素にあてはめてみると、「前に踏み出す力⇒主体性, 働きかけ力, 実行力」は①②③⑦「チームで働く力⇒発信力, 傾聴力, 柔軟性, 状況把握力, 規律性, ストレスコントロール力」が①②③, 「考え抜く力⇒課題発見力, 計画力, 想像力」①②③④⑤⑥など、どの工程もラジオの制作過程において必要不可欠な力であることがわかる。

このようなプログラムができることで、録音機材 (現在ならばスマートフォン) とパソコンがあれば、どんな学校 (団体) でも比較的簡単に取り組むことができる。また出来上がった番組のアウトプットは、校内放送や、地域のコミュニティ放送局やラジオ局との連携、あるいはインターネットでの配信などが考えられるが、次世代では先に述べた新ジャンルの音声メディアが広がり、さらに情報発信が容易にな

i 立命館大学産業社会学部教授

ii フリーアナウンサー

り導入しやすくなると考えている。

6-2 ラジオレポートの定義

ラジオに長く携わってきたが、ラジオレポートのやり方について研修を受けたりした経験が無い。おそらく、アナウンスの技術的なことは体系的に教えられるが、レポートは文章などと同じで、各自の個性が出るものであり、体系的にしてしまうと画一的で面白くないものになっていくからかもしれない。

駆け出しのころは、仕事の前後に、担当プロデューサーやアナウンサーに指摘を受け、改善し実践する。これを繰り返していくのだが、レポートは文章と同じで、好き嫌いが人によって違う。Aプロデューサーに言われて書き直した原稿を、Bアナウンサーに見せると、直したところをまた書き換えられたりすることは日常的にあった。それだけ難しいものと言えるので、各人の思うままに作り上げてほしいところだが、長年の経験から導き出された基本の型のようなものはある。それを文書化し、定義したい。

定義にあたり、私がどのようにラジオレポート制作の型を習得していったのか、経緯を記しておきたいと思う。

1. ラジオリポーターになるまで

都築の本格的なラジオ出演は1999年、NHK ラジオ第一放送の「関西ラジオタ刊」にリポーターとして採用されたことに始まる。採用はオープン（複数のタレント事務所に声を掛ける大掛かりなオーディション）ではなく、クローズド（限られたタレント事務所に声を掛け、即戦力になりそうな人材を面接）のオーディションが行われた。面接の前に、書類と音声データでの選考があった。

音声データの課題は、前年にオープンしたばかりの複合ショッピング施設（大阪市北区のHEP FIVE）を取材し、6分前後の疑似中継りレポートを録音してくるというものであった。当時、NHK ラジオは全く聴いたことがなく、ラジオの中継りレポートがどんなものかも分らなかったし、局側からは上記の

お題以外、他に何も指示は無かったと記憶している。とにかく現場に行ってみよう。面白かったものを描写して伝えてみよう。色々な人にインタビューをして、面白そうな意見を取り入れてみよう。その2点だけを考えて現場に向かった。

まず目に飛び込んできたのは、入口の吹き抜けに降り下がっている巨大な赤いクジラのオブジェだ。あらためて調べてみると、全長は20メートルで、アーティストとしても活躍していた、米米クラブの石井竜也氏がプロデュースしたものだった。今はインターネットで検索をすると、簡単に調べられることだが、当時はまだ一般的に普及しておらず、パンフレットの情報や、案内所のお姉さんに聞いてみるなど、足で情報を得るしか手段は無かった。それに取材といっても、自分はまだNHKに採用された訳ではない。自分が何者なのか説明も難しい立場で、見ず知らずの人に声を掛け、話を聞くことの難しさを痛感した。だが、同時に発見もあった。先ほどのクジラのオブジェだが、当時はその大きさや奇抜さが目新しく、その面白さをどうやって伝えたらよいか、頭を悩ませたことが気付きとなった。

「ラジオは聴いている人に、見えていないものを伝える」それは、難しくもあり、私にとっては難解なパズルに挑戦するようで、とても面白く感じられたのだった。当時どんなりレポートをしたのか音源は残っていないが、自分なりに満足をした仕上がりになったと記憶している。結果、面接を無事にパスして、めでたく採用となったのであった。

2. ラジオリポーター採用後

採用の連絡が来てから間を置かず、前任者から引き継ぎを受けるべくNHKに通った。あっという間という記憶が残っているため、おそらく1週間くらいだったかと思われる。引き継ぎに関しては、何かを教えて貰ったという記憶はほとんど無い。後に自身が後輩に教える立場になってから分かったことだが、現場で細かく教えながら、生放送を熟するのは不可能に近い。何を質問したらよいかも分からないまま、

1週間が過ぎていった。

ここで、当時のラジオ中継リポートの手順を簡単に記しておく。

- ①どんな話題をリポートするのか、新聞・雑誌、過去のデータなどから候補を探し、プロデューサーと相談の上で決定。
- ②電話で取材先のアポイントを取る。ファックスなどで確認。
- ③当日、中継の数時間前に現場入りし取材。
- ④本番までに、中継原稿を書く。
- ⑤生放送。

③～⑤は、当日の作業であり、この中継リポートを週に4本。多い時で月～金まで毎日行っていた時期もあった。

引継ぎで何を学んだということもなく、1週間と少しで、いきなり中継現場に出ることになった。最初の話題は、プロデューサーが指定してくれた。神戸市のポートアイランドで毎年行われている「神戸らん展」である。その名の通り、日本各地のらん愛好家が、ご自慢のらんの花を持ち寄り、公開するというフラワーイベントである。こちらはイベント名が変わってしまったのか、インターネット検索では記録が出てこなかったが、幾つかの記憶が残っている。ここでも、前出のHEP FIVEの疑似中継と同じような面白さを感じることができたのだ。らんの花は、その香りが大きな特徴である。まずその甘くてエキゾチックな香りをどんな風に例えたらいいのか、頭を悩ませた。おそらく「香水のような」という表現を使ったと記憶している。強く香っていることを伝えなかったのも、それには香水が一番適切だと思った。そして、らんはその複雑な形も特徴的で、これはチョウチョなどに例えたように思う。

後に後輩の指導や、研修でリポートの方法について話す機会がある時には、必ず「五感を使う」とい

うことをアドバイスしている。「視覚・聴覚・嗅覚、触覚、味覚」いずれもラジオの表現には欠かせないものである。

因みに、こうして感覚的に習得していった五感を使った表現法は、『誰からも好かれる NHK の話し方』(2016)にも、次のように記されている。「話は具体的であればあるほど、聞き手は興味をそそられます。話の場面が具体的に映像で浮かぶようであれば、関心が高まり、理解も深まります。(中略) 桃を食べるという行為ひとつでも、表現のトレーニングができると言います。桃を持った時の手触り、色、香り、重さ、大きさ、形、皮をむいた感触、果肉の色、噛んだ時の食感、のど越し、後味……など伝えられることはたくさんあります」一般向けに書かれた話し方の書籍ではあるが、NHK アナウンサーが日ごろから心掛けていた表現法として紹介されている。

中継リポート経験に始まり、すっかりラジオの面白さに魅せられ、以来20年に渡ってラジオと関わることになった。このように、感覚的に習得したものであり、冒頭にも書いたように個人によって考え方は千差万別であるが、ここでは都築が思うラジオリポートの基本形を定義してみたいと思う。

3. 中継リポートとリポートとの違い

これまでに書いてきたのは中継リポート、つまり生放送で現場からその様子をスタジオのアナウンサー(その奥にいるリスナー)に向けて伝えるリポートだった。都築が、今回のキャリア教育のプログラムとして取り入れたいのは、中継ではないリポートである。(以下、中継リポートは「中継」、中継ではないリポートを「リポート」と表記)

リポートは、事前に取材し、インタビューや現場の音などを録音機材で収録する。それを持ち帰って、構成を考え、録音素材を編集、当日はあらかじめ構成を考えた原稿をスタジオに持ち込み、録音素材を効果的に流しながら、スタジオのアナウンサーとの掛け合いでリポート内容を伝えていくというものだ。

中継	レポート
中継先から伝える	スタジオ、または現場以外の場所から伝える
取材先に生でインタビュー	あらかじめ録音（取材）したインタビュー、またはリポーターのコメントで紹介
構成はざっくりと、生のムードを活かす	構成はしっかりと考えつつ、自然なトーク

(図3)

生で伝えるというのは同じだが、中継とレポートには幾つかの違いがある。

生の中継は、現場の空気感を、スタジオを通じてリスナーに届けるのが第一の目的である。例えばこんな風に、中継の冒頭は五感を使って空気感をリスナーに伝える。

「今日は、生鮮マグロの水揚げ量日本一の街、和歌山県那智勝浦町に来ています。お邪魔しているのは、磯の香りが漂う漁港です。目の前にはずらーっと水揚げされたばかりのマグロが並んでいるんですよ！セリが始まっていますので、仲買人たちが大きな声で値段を付けていますね。その声、スタジオにも届いていますか？許可をいただいたので、大きなマグロ触ってみますね。表面はツルツルして固い！そして捌きたてのマグロ、いただきますーす！ねっとりと舌に吸い付いてくるような食感、生臭さは全く感じませんね」

屋外からの中継なら、どれくらい暑いのか寒いのか、風が吹いている様子や、イベントやお祭りが盛り上がっている様子などなど、どれくらいの空気感が伝えられるか、それによってリスナーの気持ちをラジオに引き付けることができる。それが出来れば、後は本題を伝えて、取材先の想いを短いインタビューで引き出してまとめる。これが中継の大まかな内容である。中継は勢いと、生の新鮮さが命だと言える。

一方のレポートは、あらかじめ取材をした上で、しっかりと構成を立てることが重要だ。文章は、起承転結が基本だとされるが、ラジオのレポートには当てはまらなないと考えている。ラジオは音で表現されるものであり、そこに残り続ける文字とは違う。耳

で聴いたものは、時間の経過とともに流れていき、後で振り返って聴き直すことはできない。(聴き逃し配信などは例外)したがって、起承転結のように、徐々に結果が明らかになっていくような形式はラジオには適していない。論文やビジネスの会話で推奨されているように、結論は先に述べるのが、伝わりやすいレポートのポイントである(図3)。

4、レポートの基本形

以下が私の考えるラジオレポートの基本形である。

勿論毎回型通りに進める訳ではなく、時には順番を変えてみたり、生放送の場合は聞き手の反応によって展開を変えたりすることもある。『天神祭の食文化』を例に、順を追って説明していく。

①リード

最初に聴取者に、このリポーターは今からこんなことを話すんだ、と話の概要を印象付ける。

例)「今日は大阪の夏の風物詩、天神祭に欠かせない食べものについてお伝えします」

どうだろうか。知っているという人は、「あー、あれのことかな？」と食べ物を予測しながら聞くかもしれないし、知らない人は、「なんだろう？」と興味を持ってくれるかもしれない。今から何を話すのか？しっかりと印象付けておくと、ながら聴きをしていたり、少し聴き逃したりしたとしても、話の道筋を迷うことなく掴むことができる。「今日は〇〇についてご紹介します」と、ストレートに表現しても良いが、例のように肝になるようなことは隠しておくというのが、聴取者を引き付けるコツかもしれない。

②鳥の目

俯瞰で捉えた概要, この場合天神祭のこと。

例)「(ホームページから引用) 大阪の「天神祭」は東京・神田祭, 京都・祇園祭とともに日本三大祭りの一つと言われ, 毎年130万人もの人が訪れる夏の都市大祭です。愛染祭, 住吉祭とともに大阪三大夏祭りの一つとも言われています。天神祭は, 大阪市内の天満にある大阪天満宮の氏地を中心に, 毎年, 宵宮が7月24日, 本宮が翌7月25日に定められ, 賑やかに行われます。また, この日までの間に様々な行事が行われ, 天神祭ギャルみこしや奉納花火なども天神祭の賑わいをもたらす行事として定着しています。」

大阪では誰もが知っているお祭りだが, 知らない人が聴いているかもしれない。どんなお祭りなのか, 概要が分かるような説明が必要である。

③虫の目

伝えたい事柄に焦点を絞っていく, この場合は食べ物。

例)「この天神祭に欠かせないのが, 渡御列の参加者が食べる縁起物, 白蒸し(しらむし)です。もち米を蒸し, 真ん中に梅干しを乗せて, 竹皮で包んだシンプルな携帯食。祭当日は境内でも販売されているんですよ。」

大きな概要から, 目線をどんどん絞って伝えたい事柄に焦点を当てていく。映像で言うと, 引きから段々焦点を絞り, アップにしていくというイメージである。今回は食べ物を例に挙げているので, その場で食べてみた咀嚼音(お煎餅など, 音がするものは特に)や, 音が出そうなものは叩くなどして音を届けるのも有効である。

またスタジオに入り, 目の前の聞き手(アナウンサー)相手に伝えることもある。その場合は, 紹介したいものを持ち込んで, 見てもらいながら説明することができる。とは言え, リスナーには見えてい

ないため, 五感を使った描写はスタジオレポートでも必須である。

④なぜ, どうして? 理由

例)「一見すると, 白いご飯に梅干しだけ? ちょっと寂しいような気もしますが, もち米を使っているので腹もちが良く, 真夏のお祭りで持ち歩いても痛まないのいいんだそうです。神輿を担ぐ合間でも, ぱくっと食べて栄養補給ができるということで, 天神祭りには欠かせないんですよね」

ここが起承転結の, 「転」に近いのかもしれない。なぜそこに焦点を当てたのか, それに関する理由などを説明していく。インタビューの音源などがある場合は, 取材対象の方の声で説明してもらうと説得力が増す。また音源が無い場合は, 「○○の店主, ○○さんによりますと」と断りを入れたうえで, 店主の言葉を代弁するのも良いだろう。

⑤結論

例)「大阪天満宮が建てられた2年後, 天歴5年(951年)から行われているという天神祭。

最初は「梅干しだけ?」とちょっと味気なく感じた「白蒸し」ですが, 古くからお祭りを支えてきたと考えると, 味わいが違ってきます。きっと祭りを見ながらいただくのが一番おいしいんでしょうね。この「白蒸し」は, 明後日から始まるお祭り本番に向けて, これから仕込みが始まるということです」

レポートの結び。リードで紹介した「なぜ欠かせない食べ物なのか」を回収する部分となる。取材者の視点で感じた意見を述べ, 告知などがあれば紹介して終わる。このレポートを通して何を伝えたかったのか, リスナーにどんなことを感じてほしいのかというメッセージを込める。

あらためてまとめてみると, 論文の形式である序論, 本論, 結論の構成順や, プレゼンテーションの

構成方法として知られる PREP 法などと形式が似ていることがわかる。実際の放送でも、取材先から「プレゼンの参考にさせてもらいたい」など、お褒めの言葉をいただくことがあるため、社会に出た時の訓練にも繋がるはずである。

5. その他のポイント

①リポートにタイトルを付ける

先にも述べたように、ラジオは音で表現されるものであり、そこに残り続ける文字とは違う。耳で聴いたものは、時間の経過とともに流れていきえ、後で振り返って聴き直しすることができない。そこで、今から何を話すのかをリスナーにしっかり印象付けることが重要である。即ち、自分が何を伝えたいのかを明確にしておく必要がある。一言で簡潔に何をリポートするのかを表すタイトルを付ける。例えば、上記の例にタイトルを付けるならば「天神祭を支える伝統の味・白蒸しとは？」などが考えられる。このタイトルは、放送の中では紹介しなくてもよい。

取材の前や構成を考える前にタイトルを考えると、視点がぶれることなく取材や構成を立てることができる。転じて、タイトルが思い浮かばない場合は、伝えたいことが明確になっていないと考えられるのだ。

余談になるが、筆者が毎日のように中継リポートに出ていた頃、出発前の忙しい最中に、このタイトルをプロデューサーに伝えて行かなければならなかった。先にも述べたように、このタイトルは放送では殆ど紹介されることがないため、当時は必要性が全く分からず、ただ煩わしいばかりだった。今となっては、当時の日々の訓練により、趣旨を明確に捉えたり、伝えたいことを要約する力が身についたと感じる。

②センテンスは短く簡潔に

ラジオは分かりやすさが一番大切である。書かれた文章とは違い、音声だけのラジオでは、始まりから句点までが長くなると、聞き手は話の道筋が掴みづらくなる。また、話し手も何を伝えたかったのか、

本筋を見失ってしまう。ラジオリポート制作段階で、録音したインタビュー音源を文字起こしすることがあるが、どんな内容を話しているのか整理しながら聴き直していると、簡潔に話すことの重要性が見えてくる。一般的に話が上手と言われる人ほどセンテンスが短い。更にリポーター目線で言わせていただくと、放送尺の関係上、センテンスが長い文章は使い辛く、編集が大変であるため、カットせざるを得なくなる人が多いのである。

③わかりやすい言葉を使う

ラジオを聴いていて、専門家が難しい言葉を使ってインタビューに答えているシーンに遭遇したことは無いだろうか。聞き手が「それは〇〇ということですか?」と、フォローできれば良いのだが、知識不足や終了時間が迫っていたりする場合、言葉を挟めないこともある。音声頼りのラジオでは、1つの言葉にひっかかりがあると、その言葉に思考を取られてしまい、その後の言葉が耳に入らなくなることがある。特に近年よく耳にするようになった IT 用語や若者言葉など、一般的ではない言葉は、誰もが分かる言葉に置き換える。話し手は、その為の知識を身につけておくことも重要である。

また、一般的ではない固有名詞などは、使われている漢字を言葉で説明する「字解き」が必要なこともある。全ての固有名詞に必用という訳ではなく、その漢字を説明することで理解が深まる場合や、同音異義語がある場合などが考えられる。

④原稿を作る際は話し言葉で

リポートのやり方は各自様々である。しっかりと原稿を書くか、メモ程度で臨むかは議論が分かれる部分であるが、どちらにも長所短所がある。

原稿を書くと、どうしても読み口調になりがちで硬くなってしまいがちだが、時間管理が容易である。一方、メモの場合は、自由度が高く自然なやり取りができる一方で、時間管理が難しく、内容の伝え漏れなどが起こりやすい。いずれのやり方が良いのかは、個

人の好みになるが、原稿を書く場合の注意点としては、書き言葉のままの原稿を話し言葉に直すことがポイントである。借りてきた言葉では自然に話せないし、言いよんでしまう可能性が高くなる。

他リポーターの実話で、ラジオ中継の15分前に用意していた原稿が無くなるということがあった。購入したばかりのノートパソコンで原稿を書き、「さあ、放送」という時に、バッテリーが落ちてしまったのである。当時はまだ皆がパソコンに慣れておらず、復旧の手立ては無かったが、一度一通り書いた原稿は頭に入っているものだ。ディレクターとして同行していた私は、「さっき書いたことを順番に喋ればいいから大丈夫」と、リポーターを落ち着かせ、スタジオには状況を伝えて、上手く導いてもらい事なきを得た。そのリポーターの口調はいつもより自然で、話も伝わりやすかったため、原稿を一度書いてみて、それを捨てて喋るのも1つの方法かもしれない。

⑤間違いが無いようにチェックし、嘘をつかない

特に生放送や、ゲストを迎えての収録などはやり直しがきかない。名前、地名、会社名などの固有名詞、日時、年齢(取材した時点と放送時で年齢が違う場合もある)などは、最終チェックをしておくのが取材者の責任である。また街頭インタビューなど、市井の人のコメントを紹介する場合、なかなか自分の意図するコメントが取れない場合もある。捏造したりすることがないように注意したい。

過去にも、新聞記者が談話を捏造したり、取材をしないままに記事を執筆したりの事件があった。媒体が大きい小さいは関係なく、取材してそれを発表することには責任が伴うということを自覚してほしい。

以上が、筆者が考える「ラジオレポートの定義」である。「ラジオのプレゼンテーション」等のテーマで、研修をする際に伝えていることをまとめたものとなるが、「ラジオ番組制作を使ったキャリア教育のプログラム化」を検討するにあたり、これを基に自

身の考えを更にブラッシュアップしていきたいと考えている。

第7章 考察

本稿では、ラジオ番組制作がキャリア教育に活用できるかという問いを立て、立命館大学産業社会学部20坂田ゼミの学生のラジオ番組制作を参与観察し、アンケート結果を分析、考察するとともに、自身のラジオ番組制作に携わった体験をもとにした、キャリア教育プログラムへの可能性を提案した。

参与観察については、3回生の7カ月間だけであるため、明確な答えを導き出すには至らないが、放送開始が近づくにつれ、学生たちの姿勢が変わってきたことを肌で感じる事ができた。第5章に記した、都築のオーディションからリポーターとなるまでの体験と同様に、学びが短期間で一気に進むのがラジオ番組制作の特徴と言える。

また「ラジオの生放送をする」経験が、心理学者のアルバート・バンデューラが提唱する自己効力感、即ち「課題に必要な行動を成功裡に行う能力の自己評価」(日本マンパワー, 2020)を高めることに繋がっていると考えられる。バンデューラは、自己効力感の形成や変容に影響を及ぼす要素として、次の4つを挙げている。

- ①個人的達成=自ら成し遂げた経験、最も強い影響力がある
- ②代理学習=他者の経験を通しての学習
- ③社会的説得=周囲からの励ましやサポート、褒められるなどの経験
- ④情緒的覚醒=生理的な反応、心理状態

ラジオの生放送は、1人1人が担う作業量も多く、個人の役割分担がはっきり分かれているため、それぞれが責任感を持って役割を果たさなくてはならない。そのため、個人でやり遂げたという達成感が得やすい。一方では、チームで協力して作り上げる側

面があるため、互いに助け合いながら、身近でチームの仲間の体験を観察できることが、実感を伴う代理学習に繋がる。また仲間からのフィードバックや、リスナーからの反応などが社会的説得に繋がる。こうして得た適度な自己効力感が望ましいキャリア選択へと繋がっていくと言える。

但し、自身の能力と自己効力感のバランスが重要であるため、能力に伴わない自己効力感はミスに繋がりが、意欲がそがれる結果になってしまう。1人1人の状態をサポートすることが、プログラム化に際しての重要なポイントになっていくと考えている。

第2章で、①自然な形でキャリア教育をすることができる、②学生が取り組みやすい、③プログラム化すれば指導が容易である、と述べたが、①と②に関しては本稿で明らかにできた。今後も学生の参与観察を進めながら、③のプログラム化に向けて取り組んでいきたいと考えている。

第8章 まとめ

高等教育におけるキャリア教育のなかにメディア制作実践（ラジオ番組制作）を組み込むことで、これまでとは異なるキャリア意識醸成が可能ではないかという仮説の下、都築美代子が実証検証を試みた。その家庭と結果は本稿に述べたとおりだが、一定の効果は認められると言えるであろう。しかし、その検証制度を高める作業は当然重ねていかなければならない。産業社会学部坂田ゼミでは、ゼミ活動の一環としてラジオ番組制作（収録形式、生放送形式）を行っており、2021年度も継続した実践が予定されている。また、京都信用金庫が京都市河原町御池に建設した「QUESTION」では、「人と人を結ぶ」をコンセプトにさまざまな活動、あるいは活動している人や団体の交流スペースを提供している。そのQUESTIONの1階スペースにおいて館内ラジオの制作も検討されている。

例えば、ゼミ生がその館内ラジオの制作に関わり、京都の地場経営者や起業を志す学生たちを結びつけ

る作業を通じて自らのキャリア意識の醸成につなげるということは十分に実践可能である。ゼミ生は単なる進行役ではなく、自らが人を探し、結びつけ、その交わりによって化学反応を起こさせるアクターとなれる。ラジオ制作のプロセス全てが、孵卵器としてのインキュベーターであり、起業としてのインキュベーターの双方になり得るのだ。そして、ゼミ生自身も影響をうけることで、新たなキャリア実践を行う一つのきっかけとなるのである。

今後も、都築美代子との共同研究のかたちで、実践的データの蓄積に務めていきたい。

引用文献

- ・荒木淳子・伊達洋駆・松下慶太, 2015, 『キャリア教育論』慶應義塾大学出版会株式会社, p001, p010
- ・後藤心平・佐藤和紀・齋藤玲・堀田龍也, 2017, 「高校生のラジオ番組制作によるメディア・リテラシー育成プログラムの開発と評価」『教育メディア研究』25 (2) 13-27
- ・一般社団法人NHK放送研修センター・日本語センター, 2016, 『誰からも好かれる NHKの話し方』
- ・日本マンパワー, 2020, 『国家資格キャリアコンサルタント養成講座1』p.26, p38-39
- ・日本マンパワー, 2020, 『国家資格キャリアコンサルタント養成講座3』p84-85
- ・大久保幸夫, 2016, 『キャリアデザイン入門』〔I〕基礎力編〈第2版〉p.14
- ・坂田謙司, 2015, 「ラジオ番組制作はメディアリテラシー学習でどのように活かせるか」『立命館産業社会論集』50 (4) 177-188.

参考 web サイト

- ・経済産業省, 2006, 『社会人基礎力』<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html#:> (最終閲覧日: 2020.7.30)
- ・厚生労働省, 2016, 『大学等におけるキャリア教育実践講習』<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11800000-Shokugyounouryokukai-hatsukyoku/0000148395.pdf> (最終閲覧日 2020.10.30)

・「ラジオ再評価, 聴取者急増 低刺激で在宅のお供に
休校の中高生も番組参加」『共同通信社』2020年6
月13日付 Web版 <https://www.muromin.jp/>

[news.php?id=5951](https://www.muromin.jp/news.php?id=5951) (最終閲覧日 2020.6.20)

・京都信用金庫『QUESTION』<https://question.kyoto-shinkin.co.jp/>

